北海道医療新聞　2018年12月14日

札幌徳洲会

甲状腺内視鏡サージセンター設立

技術指導で術式普及へ

厚別区の札幌徳洲会病院（鈴木隆夫理事長、奥山淳院長・301床）は、甲状腺内視鏡サージセンターを設立した。国内外の医師に甲状腺内視鏡手術の技術指導を行い、普及につなげていく。

これまでの甲状腺疾患手術は、首元を横に約10cm切開していたため、創部が残ることを懸念する患者が多く、術後は1週間程度の入院が必要だった。

一方、内視鏡下甲状腺手術は、鎖骨下2～3cmを切開するVANS法により、創部を着衣で隠せ、術後の入院日数は半分弱に短縮。▼二酸化炭素の送気が不要で空気塞栓や縦隔気腫の危険性がない▼切開創と術野が近く、用手的操作が可能で安全性が高い▼器械点数が少なく、習得が容易▼良性結節性甲状腺腫や早期乳頭がん、バセドウ病など多様な甲状腺疾患に対応可能―などの利点もある。

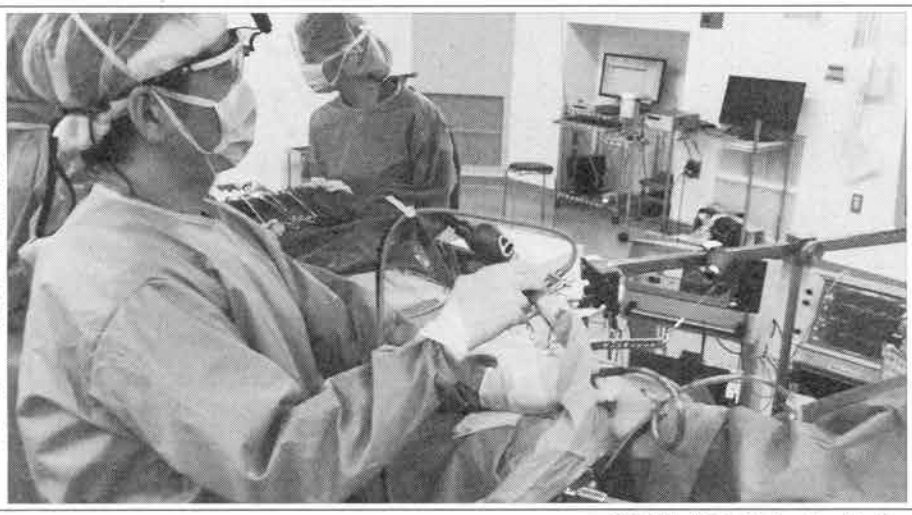
メリットの多い甲状腺内視鏡手術だが、保険診療で行うには、手術の経験症例数5件以上や、緊急手術が可能など、厳しい要件が求められることから、技術を習得しても、施設基準の認定が得られず、手術を断念する医師もいるという。さらに技術指導できる医療機関は、同病院と鹿児島大病院しかなく、普及のネックとなっている。

センター長を務める耳鼻咽喉科の片山昭公部長は、同手術の経験が500症例以上と豊富で、指導医としても活躍。国内だけでなく、タイなど海外でも技術指導を行っており、センター化により周知を図り、執刀医の増加につなげたい考えだ。

手術の効率化を目指して、皮膚切開部から金属棒を差し込み、皮弁を吊り上げて視野と空間を確保する器械を開発。従来のワイヤーで吊り上げる方法に比べて、時間短縮やワーキングスペースの確保につなげている。

高周波凝固切開装置のシャフトを11cmから18cmに延伸することで、自然なポジションで対側甲状腺の操作が容易に。また、使い切り費用約8万円だったが、新装置は50回再使用可能なため、大幅なコスト削減につながり、医師単独の術式に変更することで、人件費も減らすことができた。

片山センター長は「今後も創意工夫を重ねて、バージョンアップしていきたい」と意気込む。



開発した器械は世界中で使用されている